

70 気概の人謝道蘊の生きた時代

今年、おりおり井波律子編の『中国名言・一日一言』を読んで、心を遊ばせている。いろんなことで中断され、二月三日に配置された言葉を四月初旬になって読むということが起きる。その日の一言は、少女の発した七言の句「未だ柳絮の風に困って起こるに若(し)かず」だった。

名高いというこの句を、知ることの少ないわたしは初めて聞いたように思う。だが、柳絮という言葉は初耳ではない。十一年前、友人からのメールで、もう柳絮の飛ぶころですかと訊かれたことがある。還暦をすぎてふらふらと中国へ出かけて、瀋陽の高校に滞在していたときのことだ。ちょうど今ごろの季節だったが、宿舎の周辺で柳の綿毛が飛ぶのを目にすることはなかった。わたしよりいくらか若い畏友は群を抜く読書家で、この句を前提にメールを書いたはずである。今ごろになって、それに即妙の応答ができなかったのだと思い当たる。

井波律子さんの短い解説によれば、東晋の大立者謝安が降っている雪が何に似ているか子弟に尋ねたおりに、その句が発せられたという。わたしは関心呼び起こされた。今は十一年前よりも時間にゆとりがあるので、その少女謝道蘊(しゃどうらん)のことをインターネットで調べた。そして、感興がついて、この小文を書くことになった。

インターネット上で「謝道蘊」を検索すると、中国語の記事ばかりの中に日本語のものがあり、白牙亘という名のブロガーが『南史演義』にある逸話を書いている。それによって謝道蘊のことを知ることができた。要約してみよう。

—— 叔父の謝安が七言の一句で「大雪粉々何所似」と課題を出したら、従兄が「撒塩空中差可擬（塩を空中に撒けばやや擬すべし）」と答えたのに対し、まだ少女の道蘊が「未若柳絮因風起」と切り返して叔父を感心させた。「柳絮の才」という成句はこの話から生じたのである。さて、逸話はまだまだ続く。成長した道蘊は書聖王羲之の次男王凝之の妻になる。文才のない夫のことをこぼすと、叔父に良い人柄ではないかとなぐさめられたが、自分の兄弟や従兄弟たちとくらべて不満だったらしい。

夫の王凝之が会稽内史になると、一家は任地の会稽に住んだ。ここでのエピソードは、王凝之の末弟王献之が客との論談でやり込められそうになったのを衝立の陰から助けたというもので、やはりその才名を高めるものだった。しかし、謝道蘊がただ才だけの人ではなかったことが、孫恩の乱のときに示される。会稽内史王凝之は反乱集団の奉じる五斗米道（天師道）に共感していたので、反乱を鎮める対応が後手にまわる。会稽は陥落し、子らとともに殺された。そのとき、道蘊も侍女たちと戦ったが捕らえられてしまい、幼少の外孫が斬られそうになる。道蘊が叫ぶ、「今回の事態の責任は王

氏一門にあろう。他の一門は関係ないではないか。もしどうしてもその子を殺すというなら、先に私を殺すがよい！」。彼女の激しい語気の慷慨に、孫恩も、その子を釈放し道蘊を殺さなかった。――

わたしの思索を理解してもらうために、Wikipedia を参照して、もう少し補足しておこう。卑弥呼が使節を送った魏を篡奪した晋王朝が中国を統一したのは280年。しかし、体制は安定したものではなく、310年代、首都洛陽が匈奴によって蹂躪され滅亡した。318年、晋王の一族が建康(南京)を首都にして中国南半に建てた国が東晋である。華北では異民族がせめぎあい王朝を建てることが続き、北の魯威に相對している南の東晋でも、王権は必ずしも強くなく軍権をにぎる実力者が力をふるう。

こういう大局的状況で推移していた383年、華北を統一した前秦が百万と号する大軍を南下させようとする、謝道蘊の叔父謝安が征討大都督に任じられ、弟や甥の謝玄らに軍を指揮させて前秦軍を撃破した。歴史の教科書にいう淝水の戦いである。謝安は戦いの行なわれていたころ客と碁を指していて、前線から戦勝の知らせが来ると、「小僧たちが賊を破った」と落ち着いたそぶりをくずさなかったという。その実、客が帰ると小躍りして喜んだそうだ。大立者と呼ばれるゆえんはこのあたりにある。この逸話も、道蘊の育った謝一族の性行をかいまみせている。

謝安は、若いころは仕官せず、名門出の王羲之のサロンに出入りしていて、360年40歳で初めて、当時の実力者桓温の幕僚として出仕したという。中央に戻ってからは、桓温の王朝篡奪の野望を阻止することに努め、370年代、桓温が死ぬと政権の中枢を占めるようになる。淝水の戦いの功績によって、謝氏は王氏と同格の最高の家格になった、と Wikipedia が書く。王氏との関係は若いころからの王羲之との交流ですでに深く、それが縁で、道蘊は王羲之の息子と結婚したと考えられる。ちなみに、維基百科によれば、謝安の兄である道蘊の父は358年に死んでいる。道蘊が長女で、淝水の戦いで大手柄を挙げた七男の謝玄は343年生まれというから、道蘊が姉だったのだろう。この父は桓温から厚遇を受けて安西將軍・豫州刺史に至ったと書かれている。謝安が最初桓温のところに出仕したのはその関係からと推測できる。

人名をたくさん挙げたのはここからの話につながるからである。まず、王羲之、そして会稽という地名がわたしの感興を呼び起こす。のちに書聖と呼ばれることになる王羲之は、会稽内史の任にあった353年3月3日の節句、会稽郊外の別墅蘭亭に41人の名士を招いて曲水の宴を開いた。王羲之が出席者の詩を集めて自ら書いた序文「蘭亭の序」とその草稿の名筆ぶりは世に名高い。今回の探索が、若い謝安や王羲之の息子の王献之（やはり能筆として名高い）もその中にいたこと、また、次男の王凝之も会稽内史に任じられたことを教

えた。すると、王凝之の妻の謝道蘊も蘭亭を訪れ、のちに見ることのできなくなった「蘭亭の序」真筆（唐の皇帝が墓場にもっていった）を観た、と推察できる。昔手習いで、後世に残された模写「蘭亭帖」の一部を臨書したことのあるわたしは、会稽（今の紹興市）へ旅行して蘭亭を散策したことを思い出す。その思い出が、注目している謝道蘊を近い人にする。しかし、会稽と蘭亭のことはすでに『中国滞在記 海蝶大陸へ渡る』にも記し、「蝶の雑記帳」のほかの編でも触れたので、これ以上話題にするのはやめておこう。

もう一つ、謝道蘊が「孫恩の乱」で夫と息子たちを失ったということが、わたしの関心を引く。というのは、敬愛する陶淵明のことを「蝶の雑記帳」第45・46・46bで思索したとき、孫恩の乱が彼の人生経歴を理解する要点の一つになったからである。詳細は省くが第46話の推論からすれば、399年に起きた孫恩の乱の際、三十代の淵明は、北府軍の領袖劉牢之の率いる反乱鎮定軍の幕僚として従軍していた。『陶淵明全集』の第39「始めて鎮軍参軍となり曲阿を経しとき作る」は、曲阿が会稽方面へ向かう途上にあることからして、そのときの詩と考えられるのだ。この従軍中の作と考えられる第94「雑詩その九」と第95「その十」にある「東逝」や「東崖に逝く」という言葉も、会稽のあたりまで行ったことを証言している。

才媛として名高い謝道蘊が陶淵明と同時代人だったこと

を知って、わたしの思索はさらにさまよう。上に挙げた淵明の詩がつくられたのは王凝之と息子たちが斬られたあとだろうが、陶淵明が悲しみに沈む謝道韞の近くにいたのだと思えば、感興は深まる。時が経って、淵明は才気も気概もあった謝道韞のうわさを聞いただけだろうか。若いころの東逝をその物語とむすびつけて思い出すことがあっただろうか。

才媛の人生に悲劇をもたらした孫恩の乱は、詩人の人生の転機となった。第 45・46・46b 話を反芻すれば、軍事は教養深い人の性分に合わず、翌年、家族のもとに帰り、五年あまり断続的に役人生活を続けたが、結局五斗米を返上し、あの「帰去来の辞」を書いて田園生活に入ったのである。

じつは、陶淵明の人生はほとんど彼の詩からしか分からない。ところが、詩の表題から、401 年ころ居住地から離れて江陵に出仕したことが知られる。同じころ、桓玄という人物が、孫恩の乱の混乱の中で西府軍の総帥にして三つの州の刺史の地位を手中にし、江陵にあって長江中流域に勢力を広げた、と史書に記述されている。桓玄とは、謝道韞の父を厚遇した桓温の末子で、父の篡奪の野望を引き継いだ男だ（史書との符合を根拠に、陶淵明がこの篡奪者に仕えたとする説が流布しているけれども、その説が成立しないことを第 46 話で論じた）。孫恩の反乱が平定された 402 年、桓玄が攻め寄せると劉牢之が加担し、桓玄は首都建康への入城に成功する（この年、変節した劉牢之は配下だった武将劉裕に見放され

て没落)。翌 403 年末、桓玄が帝位を篡奪したが、わずか三か月の天下に終わる。劉裕が反旗を翻して、やがて桓玄の一党を制圧したのである。東晋の皇帝が復位したのは 405 年、実権をにぎったのは劉裕である。

この目まぐるしい争乱中の 405 年、皇帝が建康に帰還した 3 月、陶淵明は、彼の住む江州の刺史となった建威將軍劉敬宣から參軍の肩書を与えられて都へ使いをしている。第 46 話に記したことを復習すれば、劉敬宣は劉牢之の息子である。劉牢之の部将だった劉裕は、息子の劉敬宣と仲がよかったらしく、事態が治まるころ劉敬宣をその地位に就けたのだ。ところが、その仲を割く者があった。陶淵明が劉敬宣の參軍となって都への使者になった事情は、淵明が劉牢之の指揮する孫恩追討の軍中にあったとすれば理解することができる。淵明は劉敬宣・劉裕の二人と顔見知りということになるから、劉敬宣が自分の本心を劉裕に伝えるのに、人柄からしても陶淵明がふさわしかったのだ。「帰去来の辞」が書かれたのはその年の秋である。陶淵明が時代の混濁の外に身を置こうとしたことは明らかだ。

前に書いたことを長々と復唱したのは、謝道蘊という人を彼女の生きた時代に置いて理解するためである。

ここまで登場した人物たちを時代順に並べてみよう。陶淵明の曾祖父は東晋の成立期に大司馬になったが、長江より南の地元の人間だったから、北から来た支配層の中で強大な実

力者になることはなかった。謝道韞の父が下僚になった桓温は篡奪の機会を窺った。淝水の戦いの立役者は資格があったが、謝道韞の叔父謝安は桓温のような実力者になるには教養がありすぎた。次の世代の桓玄は篡奪を実行した。こういうことが実際に起きる世情は退廃が進んでいたのである。軍隊で、劉裕のように下から昇りつめる者が出る。彼は、のちに自分が復位させた皇帝を殺し、譲位させるための皇帝をいったん立て、420年、宋王朝を仕上げた。陶淵明はこの推移を田舎から見とどけて427年に亡くなっている。

こう見てくると、謝道韞も陶淵明も、東晋の行きづまっていく社会に条件づけられて人生を送ったのだと分かる。(第45話でわたしは、その時代を現在と同じ失望の時代と呼んだのだった)。陶淵明は詩人になることによってその条件から脱出しようとし、男よりも拘束されていた中世の女性である謝道韞はそれに抗い時代がもたらした悲運に立ち向かった、と理解するのは安直すぎるだろうか。

さて、果菜園「荒地」の園丁は、失望の時代を生きた五柳先生を見習いながら日を過ごしている。梅・桜桃・李・桃・梨・林檎の花々は、柳のように雪を降らすこともなく、色あせて散っていった。そして柑橘の花が咲く時季になり、独りごちている、「豈、橘花の白きこと柳絮に劣らん」と。

2018年、5月